
魔法姉弟ツインクロノ

白いサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法姉弟ツインクロノ

【Nコード】

N7276Y

【作者名】

白いサンタクロース

【あらすじ】

クロノ・ハラオウンは転生者である。

クレア・ハラオウンはTSしたクロノである。

それは、一人の神のミスから始まるストーリー

EP・i 転生しました(前書き)

以前試しに書いた物が、思った以上に好評でしたので、不定期ですが連載します

EP・1 転生しました

【転生】

二次創作では非常にポピュラーなジャンルである。

神のミスにより死亡してしまい、お詫びとして桁違いの力…チート能力を得て新たな命を持つ事だ。

そしてこの世界の神の有り得ないようなミスから物語は始まる。

彼によって死亡した人数は数億人。なにしろ、月を地球に落としてしまったのだ。

未曾有の大災害によって死亡した大量の人々は、神が一人づつ転生させた。同じ世界に何人も人間が転生し、それぞれが制限はあるものの、願い通りに転生した。

3

そう…【願い通り】に。

そしてこの物語の主人公である、【彼】が転生する順番になった。

「1111は…」

彼がいたのは光りしかない空間。

何も無い、先の見えない場所に。

「あの世なんだろうな」

「その通り！」

彼が振り向くと、いかにも神様のな人物が立っていた。腰まで届く長い銀髪に髭。白装束に杖。誰もが思い描くであろう老人が立っていた。

「えつと…」

「ワシは神じゃ。君はワシのミスで死なせてしまったの。すまんな」

「ミスって…」

実際、彼は自分の死が神のミスによるものだとは信じられなかった。自分以外にも大勢の人々が亡くなっているのだから。

しかし神の口から信じ難い事実が語られる。

「間違つて月落としてしまったのじゃよ」

「ハア!?!」

なんてことを仕出かすんだコイツ…

神の行いに、ただ啞然とするだけだった。

「という訳で、お前さんを好きな世界に転生させてやる。勿論色々特典付きでな」

「もしかして、二次創作であるアレですか？」

彼の頭に過ぎったのは【チート転生】という言葉。

「正解。ただ、本来のとは少しばかり違う世界じゃ。違うといっても、一部の登場人物の性別や年齢が違ったり、容姿が少し違う位と、物語に大きな変化を起こさない程度じゃがな」

所謂パラレルワールドの世界。

「ただし特典には制限がある」

「あるんですか？」

「同じ世界に転生させる人間が多いからの。そのせいで問題が発生する可能性があるからな」

神の言葉からして、転生者は多数存在しているようだ。

死者は多いのだ。当然と言えば当然である。

「まず一つ。意図的に原作の登場人物の親族にはなれない」

「意図的に…って事は、偶然は有り得ると？」

「うむ。生まれる場所位なら選択させてやれるからの。運が良ければ…な」

この制限が無ければ、原作そのものが崩壊する恐れがある。

例として【インフィニット・ストラトス】の世界で考えてみよう。

この世界では、男性が原作に介入するのは非常に困難だ。いや、ほぼ不可能と言っても過言ではない。

織斑家か篠ノ之家に生まれられない限り。

だからこそ、こぞって両家に転生を希望する者が殺到し、その先は言わずとも解るだろう。

おそ松くんなんてレベルではなくなってしまうからだ。

「二つ目は、ニコポ、ナデポ等の精神操作、魅了能力は不可能じゃ」

「これも皆が使うからですね」

「その通り。例えお前達から見れば、ただのキャラクターかもしれん。だが彼らもお前と同じ命がある、魂がある一人の人間なのじゃ。四方八方から魅了をかけられては精神が崩壊しかねんからな」

「僕は嫌いなんで、ちょっと嬉しいです。ん？じゃあ僕と同じって事は…」

「察しが良いな。お前の生きていた世界も、他の世界では物語の世界だったのだ」

「まじですかい…」

「どんな世界かは教えられんがの。とある一組の男女の恋愛話かもしれん、昔の戦国時代話かもしれん、逆に未来の話かもしれん」

つまり彼も、もしかしたら物語の登場人物だったかもしれない。逆に物語には登場しないような背景の一人だったかもしれないのだ。

「三つ目、知識や技術は不可能じゃ」

「自力で手に入れろって事ですか」

「自らの努力、経験で得てこそ意義があるからの」

神の言う事も、尤もである。技や知識は、その人の人生で得た掛け替えの無いモノだからだ。

「最後に死者を蘇らせる事はできない。死者を蘇らせた時点で、同じ者にはならぬからな。お前達転生者と同じく…の」

それは、彼も別の人間に生まれ変わる事を意味している。

「以上じゃな。あ、それと転生については、同じ転生者以外には話したり伝える事はできんから」

「はい…」

(つまり話したりできる人が転生者って事か)

そして神は杖を彼に突き付ける。

「では、転生するか？勿論拒否する事も可能じゃぞ」

彼は少し考え転生する事を選んだ。

「ではまず何処の世界にする？」

「えっと…魔法とかあったら嬉しいです」

「ならば【魔法少女リリカルなのは】はどうじゃ？お前さんも好き
なやつじゃろ。まあかなり人気があつて、転生者も多いがの」

生前の彼が好きな作品だ。
やはり人気なようである。

「……そうですね。お願いします」

「よろしい。さあ、お前の願いを言え。お前の望み通りの力、容姿、
年齢、場所に生まれさせてやろう。…そう、【願い通り】【間違い
なく】な」

その言葉に僅かに違和感を感じる。
特に最後の【願い通り】【間違いなく】の部分が。

(まさか…)

彼は感づいた。この神は本当に願いを叶えるだろう。だがそれだけ
だ。

正確には【願いしか叶えない】のではと。

「男性で、StrikerSの時点で成人になっている年代の管理
世界に生まれる事、魔法の才能、良い家系、悪くない容姿、でお願い
します」

「……そんなんで良いのか？宝具とかEXランクとかいらんのか？」

大抵の者は圧倒的な力と、完璧ともいえる美貌を望むからだ。

「いりません。これが一番リスクがありませんし」

「…ふむ。どうやら感じいたようじゃの。お前さんは賢いのう」

神は彼の心を読んだ。

「やっぱり…」

「左様。ワシは願い通りにしか叶えん」

要約すると、ドラエモンの四次元ポケットを望んだ場合、ポケットだけしか貰えないのだ。道具が一つも無いだだの入れ物でしかない。オッドアイで生まれれば、疾患を持って生まれる可能性すらある。

「どうしてこんな事を？」

「何。ただ欲望にまみれた者、考えの浅はかな者にはロクな事はできんからの。まあお前さんと同じく、ワシの意図に気付いた者も少なくないがな」

「つまり気付かない人の方が多いと」

「そうじゃ。言うておくが、お前さんの望みもかなり運任せじゃぞ。願ったからにはもう変えられんがな」

魔法の才能も平均以上からなのとは同等、それ以上とかなり幅広い。生まれる家も同じだ。

「わかってますよ」

「よろしい。因みに原作知識と自分の能力は、絶対に忘れんからな」
つまり彼は能力と同じく、リリカルなのについては一切記憶から消えないのだ。

「では、第二の人生を楽しむが良い」

「さようなら」

彼は光りに包まれ、その場から消えた。

「さて、次は……何？銀髪オッドアイ、ニコポ、ナデポ、魔力無限、無限の剣製？ニコポ、ナデポ以外は可能じゃぞ……生まれてすぐ死ぬかもしれないがの（ボソ）」

ここはミッドチルダのとある病院。

その産婦人科の病室に一人の男性と幼い少女が入って来た。

彼の名はクライド・ハラウン。その手に引かれる幼い少女は、二年前生まれれた彼の娘、クレア。

二人が入った病室には、緑の髪をした女性がベットに横たわっている。

彼女はクライドの妻、リンディ。

「男の子ですって」

リンディは隣に眠る生まれただけの息子に視線を送る。

「ああ。ほら、クレア。弟だぞ」

「……ん」

クライドはクレアを抱え覗き込む。

新たに生まれた命。己の息子と対面する。

少女は初めて見る弟という存在に困惑する。なにしろまだ二歳なのだ。無理もない。

だが、これだけは理解していた。この子は自分が守るべき存在だと。

「ねえ。名前はやっぱり……」

「クレアの時に考えておいた、男の子の名前だな」

「ええ。フフツ」

二人は揃って息子の頬を撫で、その名を口にする。

「「クロノ」」

そしてその翌年、クライド・ハラオウンは、二十五歳という短い生涯を終える。

二人の子供と妻を残し、いくつもの悲劇を生み出した、深い闇に飲み込まれた自らの艦と、運命を共にしたのだった。

EP・i 転生しました（後書き）

基本的に三人称視点です

EP・2 生まれた世界（前書き）

続けて行きます

近い内、無印の前に設定を書きます

EP・2 生まれた世界

クロノ・ハラオウン。

彼は転生者である。

ただ、原作のクロノに憑依したのではない。本来のクロノは、彼の姉であるクレアだ。この世界は、クロノの性別が逆な世界なのである。

自分は、クロノの名を与えられただけの別人だと。

その事を確信したのが、クロノが三歳の時。クレアが士官学校に入学、さらにグレアム提督の使い魔に弟子入りし、魔導師として訓練を始めたのがきっかけだ。

意識がはっきりした以前から、妙だと思っていた。自分の魔力資質が高いのは神によるものだとしても、父、クライドが自分が生まれてから一年で死亡した事、姉の年齢が二つ上だという事。

そう、この世界の原作と違う部分を理解した。

その年は主人公であるなのは生まれた年だ。この一年間、ミッド等の管理世界で大量の赤ん坊が出生後死亡したり、脳や身体に重大な障害を持って生まれる事態が続発した。

勿論転生者達である。

なのはの運動が苦手という事に魔力が原因といった説があが、それが正しいと考えると、なのは以上の魔力を生まれながらに保有しているのだ。無事でいられるはずがない。

無闇矢鱈に力を求めた結果、人間に扱える力でなくなり、その身を滅ぼしたのだ。

勿論地球の海鳴でも、同じ事が起きている。
管理局は把握していないようだが…

「お母さん。僕も魔法の勉強がしたい」

さらに二年後。クロノは、母リンディに、自分も魔法を学びたいと伝えた。

当初クロノは、魔法を学ぶ事を恐れた。他の転生者達である。KYと嫌われ者である彼と同じ名前、容姿を持って生まれた彼は、四歳の時やはり転生者に襲われた。自分より二つも年上の少年に。彼が望んだのはカプトゼクターで、ゼクターに認められてなく、クレアが助けに入った為、命に別状は無かった。そしてこれが、クレアにとって初めて人間を魔法で攻撃した事である。

見ず知らずの年上の少年にいきなり殴られるなんて、四歳の子供からしたらトラウマものの事件だ。しかしクロノも転生者。自分が襲われる理由も、彼が言った意味も理解できている。

これからはもっと大勢の人に襲われる。それから逃れるには、名前

を変えたり、余所の家に養子になるなりして自らの存在を隠すしかない。

だが、クロノは戦う事を選択した。

彼が【リリカルなのは】と出会ったのは、二次創作からだった。

読んだ物全てではないが、大半の作品でクロノが【神聖な少女達の誇りを賭けた戦いを邪魔した愚か者】【自分の思い通りにならないとわめく子供】と散々な扱いを受けていた。

しかし、いざアニメを見てみるとどうだろうか？

彼は危険行為を止めに来ただけで何の非も無い。さらにフェイトの無罪の為に奔走し、その後の闇の書事件も、はやてやヴォルケンリッター達の為に動いたのだ。

自らも闇の書の遺族であるのに…

だからこそ、クロノは自分に与えられた名に恥じぬ生き方をすると身勝手な解釈や欲望に塗れた者に負けまいと。

クレアと同じく、リーゼ姉妹に弟子入りしてからというもの、クロノは目まぐるしくその能力を磨いていった。神に与えられたのはあくまで才能。それを力にできるかは己次第だからだ。

クロノは努力した。自分の身を守る為、家族を守る為、そしてこれから起こるであろう数々の事件と戦う為に。

姉のクレアも同じだ。

才能で劣るとはいえ、姉の意地、そして弟を守る為、【こんなはずじゃない人生】と戦う為、同じ思いをする人を一人でも多く救う為に。

二人の特訓は過酷だった。

姉妹との模擬戦は元より、無人世界でのサバイバル、戦術を組む為

の座学、魔力総量を上げる為の負荷訓練。何から何まで幼い姉弟には耐え難い事だった。しかし二人はこなしていった。譲れない思いがある。勝たなければならぬ戦いがあるから。

ここは時空管理局、ギル・グレアムのオフィス。

「ふむ…」

「どうですか、父様」

「二人共優秀だよ」

その主である彼は、自らの使い魔達から渡された、ハラオウン姉弟の特訓の報告を見ていた。

親しい間柄であり、部下であったクライドの子供達。彼にとっては孫のようにも思える存在だ。

だからこそ自分が許せなかった。あの闇の書事件で死ぬのは自分であるべきだった。彼は死ぬべきでなかったと。

そして独自に闇の書を追い、封印方法を探った。それが半ば違法であることも。

そしてついに見つけた。封印方法を。後は闇の書を見つけるだけ。
グレアムの視線がクロノの報告に止まる。

「……素晴らしい」

クロノには氷結系の変換素質があり、さらに変換技術も高く、才能を伸ばし続けていると。

「確実に封印する為に、クロノの力が必要だな……」

「クロ助ねえ……」

「これからも二人を頼むぞ」

「はい」

二人が部屋から出て行く。

闇の書の永久凍結。クロノの協力があればより確実になる。

だが同時に罪悪感がよぎる。この行いは復讐に近い。そんな事に彼を利用しようとしている自分がいる。

しかしクロノには親の敵討ちをする権利がある。ならばその機会を与えてやるべきではないか？

見苦しい自己弁護だが、これ以上犠牲者を出さない為には必要だ。そう自分に言い聞かせる。

強制はしない。ある意味命を奪うより残酷な事だから。

グレアムはデスクに置かれた地球儀に触れる。

(あと少し……地球に転生したのはわかったのだ。あとは主を突き止めるだけ)

地球儀を回転させると、一つの国が目にはまる。

日本。

彼も何度が行った事のある国であり、十年程前から多くの局員が移住した世界。

勿論その局員は、転生者の親となる人々。確実に魔力とデバイスを得る為に、親が局員であると願ったのだ。

(…少し調べてみるか)

何か運命的なものを感じたグレアムは、日本の調査に乗り出した。そして半年後。八神はやてを見つけたのだった。

クレア・ハラオウンが九歳の時、史上最年少の執務官となった。

彼女は自宅のリビングで一つの資料を見ながら頭を悩ませていた。

「姉さん、どうしたの。溜め息なんかついて」

クロノが牛乳の入ったコップをクリアに渡す。

「ありがとう。ちょっとね…」

コップを受け取り、一口飲む。

「それ、何？」

「私の補佐官の立候補者リスト」

クロノが見ると、数人の少年少女の顔写真とプロフィールが書かれた資料だった。その程がレアスキル持ち。そして何処か見たような顔。

クリアが何者が気付いた転生者達である。

「周りからの評価も、スキルに頼ってるだけって連中でね。面接しても、なんか嫌な感じで…」

彼女の補佐官となり原作に介入する。そんな魂胆が丸見えな上、クリアに対し下心を持つ輩が多いのだ。

KYでも女性なら話しは別。そんな考えなのだろう。

「クロノ。私の補佐官にならない？」

「それも魅力的だけど、姉さんの下だと甘えちゃいそうだから遠慮しとく」

「ええ〜お願い!」

手を合わせてクロノに頼み込む。

「…エドワードがいるじゃないか」

本名、エドワード・リミエッタ。この世界のエイミーである。当人の性別が変わっているのなら、将来結ばれる相手も変わって当然である。

「なんでエドが出てくるのよ!」

テーブルを叩き立ち上がる。

「優秀なんだろう? 良いじゃないか、仲良いんだし」

「う…。なんでそんなに嫌がるのよ…!」

「嫌な訳じゃないよ。執務官に興味が無いだけ。とりあえず今は捜査官の資格を取って、色々と思おうんだ」

「…わかったわ。エドに頼む」

「そうしなよ」

実際、クロノは氷結といった、ロストロギアの封印に有効な手段を持っている為、特別捜査官になる事を薦められている。

(しかし、どうしよう…これ)

クロノは一枚のカードを取り出した。先日、グレアムからプレゼン

トされたデバイス。【ローラン】である。

「それ、提督からプレゼントされた杖でしょ？」

「うん」

「デザインはS2Uに似ているけど、中身は別物ね」

「氷結強化機構が組み込まれてるからね」

ローランはS2Uとよく似た形の杖だが、クロノの氷結系を強化し、より一層強力な魔法が高速で運用できる杖である。

デバイスとの相性も抜群。だがクロノには少しだけ嫌な予感がしていた。

これはデュランダルのプロトタイプなのではと。

その予感の的中しており、グレアムはこの杖を元にデーターを収集しデュランダルを作り上げ、クロノに託すつもりでいた。

「あんなにインテリジェントを欲しがってたのに……。やっぱり提督からのプレゼントからかしら？」

「それもあるけど、やっぱりストレージの方が軽いんだ」

「そうよね。処理速度がねえ……」

クロノも当初は、相棒たるデバイスに憧れた。だが、いざ使ってみては勝手が違った。

自分の命を預ける物だ。確実に自分に合った物の方が良い。

クロノは戸惑いつつも、ローランを自らの杖と決めたのだった。

第97管理外・地球。

この世界で大事件が起きた。クロノが八歳…なのはが五歳の時。高町士郎が重症を負った年である。

事件の内容はこうだ。

第97管理外・地球の日本、海鳴という町にて十数名の少年少女が戦闘し、多数の死傷者を出した。現場はギル・グレアム提督の指示の下、直ぐさま鎮圧された。

この事件の逮捕者の半分は、局員の子供であり、残りは現地住人だが、違法デバイスを所持している事がわかった。

要するに、なのはの気を引こうとした転生者達が、お互いに殺し合いを始めたのだ。局員の子供は親から貰った物を…そうでない者は拾う等、なんらかの手段でデバイス、能力をデバイスとした物を使い争った。

勿論グレアムが介入したのは、最近発見したはやてを隠蔽する為だ。

こうしてはやてを隠蔽し、事件は無事解決。事件に関わっていない、

多くの移住した局員までもが管理世界に戻り、現地住人でさえリンカーニアに封印処置が施され、武器を没収された。

物語は確実に近づいている。

介入者を間引きながら。

EP・2 生まれた世界（後書き）

多分次の次から無印かな？

EP・3 目前（前書き）

少し修正しました

原作介入までです

次回設定を書きます

EP・3 目前

原作が始まる日が刻々と近づいている。

ハラウン姉弟は順調に腕を磨いていった。

度重なる転生者との戦い。局員としての実戦。

クレアに至っては原作以上に力を付け、十四歳でありながらS-にまで成長した。クロノも負けじとAAAに合格し、特別捜査官としての資格を取った。本来のクロノには一步劣るが、それでも彼の能力は他の局員とは飛び抜けた実力を有していた。

そして転生者の襲撃といえは、ギル・グレアムにも起こった。はやてを封印しようとしたからである。

しかし今彼が亡くなれば非常に危険だ。はやての生活は彼に依存していたのだから。

彼の身に何かあれば、はやてへの支援が止まり、はやてが施設に入る可能性すらある。そうなってしまうえば、身体の悪い彼女は格好の獲物となり、イジメの対象になるだろう。それは心優しい彼女でさえ、確実に心を蝕み、力を手に入れたはやての行動を変え、最悪の事態を起こしかねない。

しかしそんな事は起こらず、彼は転生者達を返り討ちにし、尽く逮捕していったのだ。

彼の人物像をよく考え欲しい。グレアムは地球出身でありながら提督の地位に就き、【時空管理局歴戦の勇士】と呼ばれる程の人物なのだ。最低でもオーバースランクは確実である。

さらに彼の使い魔の存在もある。アルフの存在がフェイトの評価になってるように、使い魔の性能が主の優秀さに繋がってるのだ。

彼女達はどうか？作中では、なのは、フェイト、クロノを手玉に取り、不意打ちとはいえヴォルケンリッターを闇の書に蒐集させ、全滅させたのだ。並大抵の実力ではない。いくら神から力を与えられたとはいえ、そんな桁違いの実力を持つ人間に戦いを挑むのは、正直簡単では無い。例えるなら、強いキャラを使うチャンピオンに、最強キャラで挑む素人のようなもの。無謀である。

そしてここは地球。

ここにこの物語に深く関わる、二人の転生者がいた。

一人の名は神道刃。しんどうやいば

彼は生前読んだアンチ転生の創作物から、万が一の事を考え能力を得た。自分が最強になれるように：自分が主人公になる為に：結果として刃の目論みは成功。海鳴に生まれ、土郎の件も転生者達の自滅のスキを狙いなのはと親しくなり、さらに私立聖祥大学付属小学校に入学した。そして、転生者同士の争いで少しづつだが腕を磨き、さらになのは、アリサ、すずかを上手く魅了し、原作にも介入し始めた。

しかし彼は一つだけミスをした。ユーノの扱いである。刃はユーノをぞんざいに扱い、接した。ユーノも自分が巻き込んだ負い目から

何も言わなかったが、それになのはが感づき出し、少しずつ刃に対する不信感を生み出していった。

もう一人の名はカレル・小川。

彼は原作には関わらず、ただ有意義な人生を送る事を望んだ。クロノと同じように才能を求めただけである。

たしかにカレルも、心の奥底には原作に介入したいといった気持ちはあった。だが数多くの転生者の存在が、カレルの介入する気持ちを失せさせた。

だが彼に転機が訪れる。

ジュエルシードを拾ったのだ。そこに他の転生者が現れ、ジュエルシードを渡すよう脅した。当然、転生者の目論みはフェイトに渡し、原作に介入する為である。

それだけでなく、その場にフェイトとアルフも現れた。転生者はカレルを悪役にしようとフェイトに言い寄ったが、その邪な感情に感づいたアルフに切り捨てられてしまった。

カレルはジュエルシードをフェイトに渡し立ち去ろうとしたが、転生者は逆上しカレルに襲い掛かった。しかしフェイトとアルフが助けに入り、撃退したのだ。その事がきっかけで、カレルは二人の頼みで現地強力者として、原作に介入する事になった。

そしてカレルは決意する。彼女達を先程のような転生者から守らなければならぬと。物語を破壊する者と戦おうと。

カレルの予想は的中した。神道刃である。

刃の言動から、カレルは刃を最低な男と判断した。この少年が敵なのだ。

ユーノを盾にし道具のように扱う。自分に対し殺傷設定で攻撃してくる。

幸い、実戦経験と能力は劣るものの、母が元聖王教会所属の騎士で

あつた為、鍛えていたおかげで二度に渡る戦いを生き抜いた。

カレルは戦った。フェイトの代わりにジュエルシードを抑えた。助けに行けなかった、プレシアから虐待を受けるフェイトを支えようとした。少しでも物語を良い方向に向かわせようと。

何人もの転生者に出会った。中にはカレルを応援する者もいた。しかしカレルを邪魔者として排除しようとする者の方が多かった。彼は努力した。母に、フェイトに教えを請うた。強くなる為に。邪悪な者に打ち勝つ為に。

ここはアースラ。

「みんなどう？今回の旅は順調？」

アースラの艦長である緑の長髪の女性、リンディが乗組員に聞く。

「はい。現在第三船足にて航行中です」

「目標次元到達には、今から凡そ百六十ペクサ後に到達予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが、二組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

艦長席に座りながら思考を巡らせる。

小規模とはいえ震。次元リンディに僅かだが不安がよぎる。

「失礼します。リンディ艦長」

そこに一人の少年が紅茶を持ってきた。あほ毛が特徴な、中性的な少年。

彼はエドワード・リミエッタ。クレアの補佐官で、アースラのオペレーターである。

「ありがとう。エド」

リンディは紅茶を一口飲み呷いた。

「小規模とはいえ次元震の発生は…ちよつと厄介なものね」

小規模次元震は、昨夜のなのは、フェイトが衝突した事により起きた、ジュエルシードの暴走によって起こった物である。

「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと」

リンディはそう言って、黒いバリアジャケットの背中くらいの長髪の少女と銀色のバリアジャケットの少年に目を向ける。

「ね。クレア、クロノ」

「大丈夫。わかってますよ、艦長」

「僕達はその為にいるんですから」

二人は己のデバイスであるカードを握りしめた。

そしてついに介入の時。

「現地ではすでに戦闘が始まっている模様です」

「中心となっているロストログアのクラスはA+、動作不安定ですが無差別攻撃の特性をみせています」

乗組員が今の状況を話す。

モニターにはなのはとフェイト、そしてカレルと刃が映っていた。

その映像を見ながらクロノは僅かに顔をしかめる。
転生者の存在だ。

おそらく自分ま真つ先に攻撃される可能性が高い。だが逃げるなんて真似はしない。この名に賭けて。

「…次元干渉型の禁忌物品、回収を急がないといけないわね」

リンディが報告を聞き、立ち上がりながら判断を下す。

「クレア・ハラウン執務官、クロノ・ハラウン特別捜査官、出られる？」

リンディがクロノとクレアに出撃出来るか尋ねる。

「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも」

「僕達にご命令を。艦長」

「それではクレア、クロノ、これより現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、そして、関係者達からの事情聴取を」

「了解です！艦長！」

リンディは二人の返事に目を瞑り、頷く。

二人は転送ポートに向かった。

「どうしたのクロノ？なんか緊張していない？」

「ロストロギア関係だ。緊張するよ」

いや、正確には転生者絡みの方が強い。しかし、だからこそクロノは気合いを入れ直した。

自分は今まで何人もの転生者に出会った。

士官学校の頃は、自分を敵視し陥れようとした連中に何度も襲われた。逆に自分を助け、原作に介入しようとして下心が見え見えな連中もいた。

だがそれだけでない。本当に自分の味方になってくれる転生者もいる。彼らには自分も転生者である事を伝えた。皆はクロノを応援した。頑張れ。負けるなと。

彼らはクロノの掛け替えの無い戦友となった。共に次元世界を守ろうと。邪悪な考えと欲望に塗れた転生者と戦おうと。

だからクロノは立ち上げられる。一人ではない。背負うべきものが、守るべき人がいるのだから。

「行こう、姉さん」

「あ…うん」

クレアはその顔に父の面影を見出し、少しどぎまぎするが、直ぐさま自分も気持ちを入れ替える。

「気を付けてね」

振り向くとリンディが白いハンカチを振りながら言ってきた。

二人はリンディの行動に戸惑うような、呆れるような感じになりながら転移する。

「はい…行ってきます…」

「行ってきます」

そして二人はアースラから姿を消した。

現地ではハルバード型のアームドデバイスを持つカレルと、魔導書型と銃と刀が合体したようなデバイスを持つ刃が対峙している。

「運が良いな。今回はKY討伐があるから見逃してやるよ」

「お前：本当に最低だな」

「黙れよホモ。オリ主の俺と戦えるだけ有り難く思えよ」

余りにも身勝手な言動をする、赤い長髪の美少年：刃を睨む。

この男はクロノを攻撃する。だが自分が残ればフェイトにも迷惑がかかる。だから信じるしかなかった。原作キャラの実力を。

対称的に刃は心の中で舌なめずりをした。

ついにこの時が来た。クロノ・ハラオウンを痛め付ける瞬間を。両親も管理局とは関わりが無いから、知らない事にして、存分に攻撃できる。そして痛め付けた後はリンディを言い負かし、なのはに格好良い所を見せ付けようと。

しかし彼は知らなかった。

自分が敵視する存在が、欲望の対称である美しい少女であると。その名を持つ者が自らの野望を打ち砕く、凍てつく剣である事を。

そして遂にその時が来た。

なのはとフェイトが飛び出した瞬間、水色の魔法陣から二つの人影が現れる。クロノとクレアが。

二人の魔導師、なのはにはクロノが。フェイトにはクレアが、それぞれデバイスを受け止める。

「ストップよ！」

「この場での戦闘は危険過ぎる！」

カレルと刃が驚いて目を見開く。自分の知る人物と違うからだ。

一人は銀色のバリアジャケットと杖を持つ少年。もう一人は黒いバリアジャケットと杖を持つ少女。

転生者か？それとも原作との相違点か？

混乱した二人を相手にせず、少女は威厳と正義感に満ちた声で名乗る。

「時空管理局執務官、クレア・ハラオウン」

少年は誇りと信念を持ち、その名を名乗る。

「同じく時空管理局特別捜査官、クロノ・ハラオウン」

クロノは今、職務だけでなく、醜い欲望を打ち砕く為にその場にいる。

「「詳しい事情を聞かせてもらおうか」かしら」「！」

クロノの本当の戦いが、今始まる。

EP・3 目前(後書き)

設定の次は戦闘です

設定（前書き）

お気に入りが凄い事に…

皆様ありがとうございます

設定

クロノ・ハラオウン

外見：原作クロノと同じ（無印時の身長も同じ）

年齢：無印で十二歳

魔力：S -（水色）

ランク：AAA、ミッド

バリアジャケット：原作クロノのものを銀色にし、肩のトゲや裾、手甲を黒にしたもの（ようするに色を逆転にしたもの）

趣味：魔法とお茶

好きなもの：家族

嫌いなもの：ヘイト系、最低系転生者、すっぱい食べ物

特技：お茶をつぐ事、気温を当てる事

苦手な事：料理（シヤマル以下）

この物語の主人公。魔法の才能と家柄、良い容姿を望み、ハラオウン家長男として生まれる。

自分に与えられた【クロノ】の名に恥ぬよう、頑張る努力家。

度重なる転生者との襲撃やリーゼ姉妹の特訓により、かなりハイス

ペック。今でも鍛練は欠かさない。

全ての転生者を嫌ってる訳でなく、士官学校でも転生者の友人がいた。

氷結に関する能力が高く、その技能を認められロストログリア封印を得意とする特別捜査官の資格を取った。

原作については、やれるだけの事をやると決めている。

料理の腕前は、見た目は普通だが味が壊滅的である。

ローラン

外見：銀色のS2Uで、先端の円柱部分が六角柱になっている

待機形態：カード型

クロノの杖であるストレージデバイス。正体はデュランダルのプロトタイプで、デュランダルには劣るものの、氷結強化機構が組み込まれている。

声はデュランダルと同じ。

クレア・ハラオウン

外見：背中にかかる位の長い黒髪の少女、体格は幼い、身長もクロノと変わらない

年齢：無印で十四歳

魔力：原作クロノと同じ

ランク：S -、ミッド

バリアジャケット：原作クロノのものに、下半身をロングスカートにしたもの

趣味：仕事、ぬいぐるみ集め

好きなもの：家族、仕事

嫌いなもの：犯罪者、甘い食べ物

特技：覚えた事を忘れない

苦手な事：特に無し

この世界の本来の【クロノ】。

女性なので、原作より多少丸い性格をしている。ハイスペックな弟の存在や度重なる転生者との戦いで、原作以上に強い。

自分の体格を気にしており、よくマッサージなどをしている（リンデイにはばればれ）。

因みに家事の腕前は普通。

若干ブラコン。

S2U

原作と同じ。

カレル・小川

外見：耳が隠れるくらいの水色の髪に青い瞳で中の上程度の顔、身長はフェイトと同じ位

年齢：無印で九歳

魔力：A A + (青緑色) 近代ベルカ

ランク：無し

バリアジャケット：ダークグリーンに着物に紺色のマフラー、肩に銀色の金属鎧がついている(イメージはうたわれるもののベナウイ)

趣味：お笑い番組を見る事

好きなもの：運動、お笑い番組、辛い食べ物

嫌いなもの：ヘイト系、最低系転生者(特に刃)、粘り気のある食べ物(納豆など)

特技：身体が柔らかい

苦手な事：鈍感(自分以外にも)

才能、家を望んだ転生者。父は地球人だが、母が元聖王教会所属の騎士。

遠見市に住み、私立聖祥大学付属小学校に、バス通学をしている。
なのは達とは違うクラス。

真面目で熱血漢だが、暑苦しい部分もある。

偶然フェイトと関わるようになり、原作に介入する事になった。フェイト、アルフとの仲も良く、物語を少しでも良くしようと思ってる。

母親からの手ほどきで、地球の転生者では上位に入る実力を持つ。

ゼファア

柄が緑のハルバード型的人格搭載型アームデバイス。柄の先端、斧や槍がつく所のすぐ下に、グラーファイゼンと同じタイプのカートリッジシステムが搭載されているが、本人は滅多に使わない。

声は若い男性。テンションが高く熱血馬鹿。

神道刃

外見：背中まである赤い長髪、紫の瞳をもつ桁違いの美少年、身長はユーノより少し高い

年齢：無印で九歳

魔力：SS（虹色）

ランク：なし、古代ベルカ

バリアジャケット：胸元を開けた黒いコート（イメージはDMCのダンテ）

趣味：女の子と遊ぶ事（美少女のみ）

好きなもの：美人、自分

嫌いなもの：原作の男性キャラ、他の転生者全て、自分の思い通りにならない事、自分より優れている男

特技：ナンパ

苦手な事：すぐに興奮し周りが見えなくなる

最強の肉体、リンカーコア、海鳴に生まれる、女たらし、戦いの才能、最高の容姿、強運、自分の考えたロストログアクラスのデバイスの適合者になる事を望んだ転生者。自分こそ主人公と信じ、行動している。自分勝手にハーレムを狙っている。

幼少の頃からなのはと付き合いがあるが、高町家からは好ましく思われてない。

多少鍛えてはいるが、あくまで我流な上、実戦も素人である転生者だけなので、カレルと互角なものも能力のおかげ。全力のフェイトには劣る。ただしそれは現在の状態で、潜在能力は高いので鍛えれば強い。

新月の書

赤黒いカバーに銀の逆十字架が描かれた魔導書。刃にしか扱えず、刃が死亡した場合消滅する。

刃のイメージを魔力で再現する能力を持ち、所謂【自分の知る漫画

やアニメ全ての技、能力全部の使用】を疑似的に可能にしたデバイス。燃費も恐ろしく良く、使い方によっては、文字通りなんでもできる。

アカシックセイバー

金と銀の大型で銃身の長い銃に下部から手の部分まで刃が伸びている（イメージは、デイバイダー996の第二形態を簡略化したもの）。銃の中心にリボルバータイプのカートリッジが搭載されている。人格搭載型だが殆ど喋らず、時々刃を肯定するくらい。声は低い女性。

リンディ・ハラウン

原作と変わらず。

エドワード・リミエッタ

エイミィをそのまま男性化させたようなあほ毛の少年。クレア、クロノとも仲が良く、よくクロノと二人掛かりでクレアをからかう。

高町なのは

基本原作通り。刃に対して恋心を抱いていたが、最近不信に思っている。

ユーノ・スクライア

刃の家に世話になってるが、扱いは悪い。ジュエルシードの件で、自分にも非があると思いい耐えている。

今の所は、なのはに対しての恋愛感情は、少し気になる女の子程度。

フェイト・テストロッサ

カレルとの出会って、原作より明るい。カレルに対しては今の所、友愛のみ。

アルフ

基本原作通り。カレルの事も信頼している。ただし刃は【臭い】らしい。

ギル・グレアム

闇の書封印にクロノの協力を求めようと考えてる事以外は原作通り。

リーゼ姉妹

原作通り。

八神はやて

幼い頃から転生者に言い寄られた結果、男性恐怖症になってしまっ

た。人付き合いも苦手になっている。

クロノの使用魔法

ステインガレイ/Stinger Ray .

原作と同じ。主に対人非殺傷攻撃に使用。

フロストキャノン/Frost Cannon .

ブレイズキャノンの氷結版。上手く使えば、敵を凍結停止させられ、最大出力なら封印にも使用できる。

アイシクルバレット/Icicle Bullet .

氷柱を撃つ射撃魔法。物理的な攻撃なので、対物攻撃として使用。

アイシクルブレイド/Icicle Blade .

ローランの先端から氷の剣を形成する。近接武装として使用。大き
さも変えられ、大型の薙刀としても使える。

勿論槍術は習得済。

ダイヤモンドダスト / Diamond Dust .

氷弾の拡散弾。連射はできず一発の威力は低いですが、遠距離での弾膜による牽制、零距离での破壊力は高い。

グラスコフィン / Glass Coffin .

エターナルコフィンの簡易縮小版。ローランで触れた相手を凍結させる。

なお、この魔法はグレアムから直々に教わった。

ランページブリザード / Rampage Blizzard .

クロノの奥の手その一。自身の周囲を無差別に凍結させる空間攻撃魔法。デアボリック・エミッションの氷結版のような魔法。消耗が激しく、二回使用はできない。

アイスドール / Ice Doll .

奥の手その二。自身に何か触れた瞬間、その部分を凍結硬化させる防御魔法。発動中は魔力を消費し続け他の魔法の使用が難しくなる。攻撃能力は著しく低下する分防御力は高い。

設定（後書き）

ローランはデュランダルを持ち主の名前です

クロノ強過ぎですかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7276y/>

魔法姉弟ツインクロノ

2011年11月23日23時47分発行